

## 枝打用新勝鎌（小）の砥ぎ台の考案について

新城営林署 齊藤利治  
後藤清

### 1. はじめに

昨年三重県の海山林業において数日間ではありましたが、野中先生による新勝鎌を使用しての枝打研修を受け枝打の必要性を強く感じました。

段戸国有林も枝打を実行しなければならない林分が多く、私達造林手に課せられている責務は重大だと思います。幸い豊邦担当区では、今年度から2メートル以下の枝打作業は新勝鎌を使用することに予定されています。

### 2. 砥ぎ台考案の経緯

何事も始めて使用するときにはいろいろと抵抗があるように、新勝鎌は両刃で、しかも背にも刃がついているので砥ぐのに非常に時間と危険を伴ない、個人差は多少はありますが約40～50分程度要します。

### 3. 考案の要点

前記のことを解消することを重点に、安全で早く砥げる方法はないものかと考え、雨降りを利用して各人1個ずつ試作することにしました。

### 4. 砥ぎ台の紹介（1図と写真のとおり）

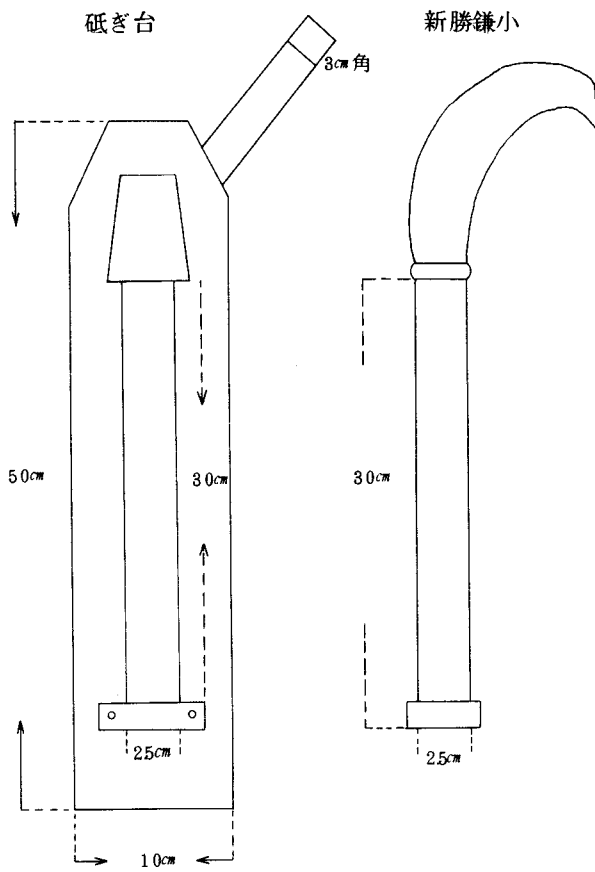
固定方法として、桧の打ち出し木を素材で台木とした。台木の長さ50センチメートル、巾10センチメートルの固定台を作る。柄の長さ30センチメートル、太さ「直径」2.5センチメートルであるので、この柄が入る溝を堀りその溝に柄の部分が入るようにし、1ヶ所金具で固定する。刃の部分は固定台から刃の長さの腕木を取り付け、刃の先端部分に3センチメートルの台木を付け刃を下から支えるようにした。しかし、これでは片面しか砥げないので腕木を半円状に手動できるようにし裏面も砥げるようになった。

### 5. 砥ぎ台の考案によって

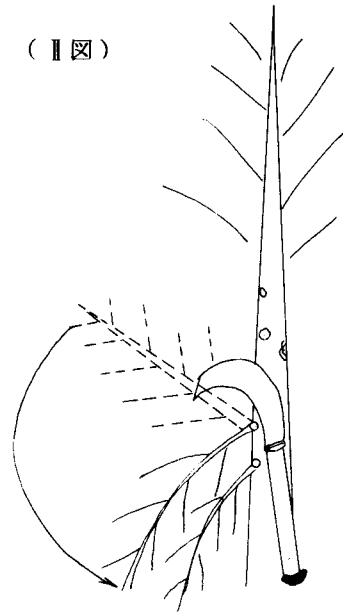
#### (1) みんなで作った成果

私達の仕事は常にグループ作業であり、「個人プレーは許されないことは当然だ」と各人、承知

( I 図 )

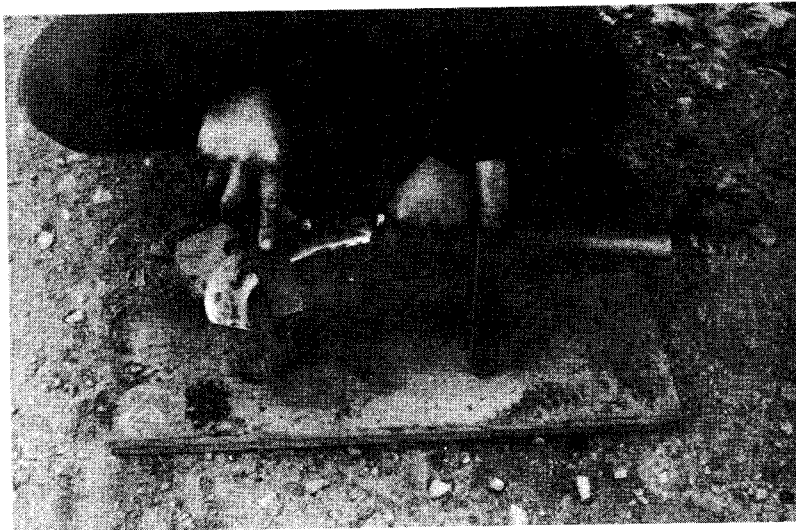


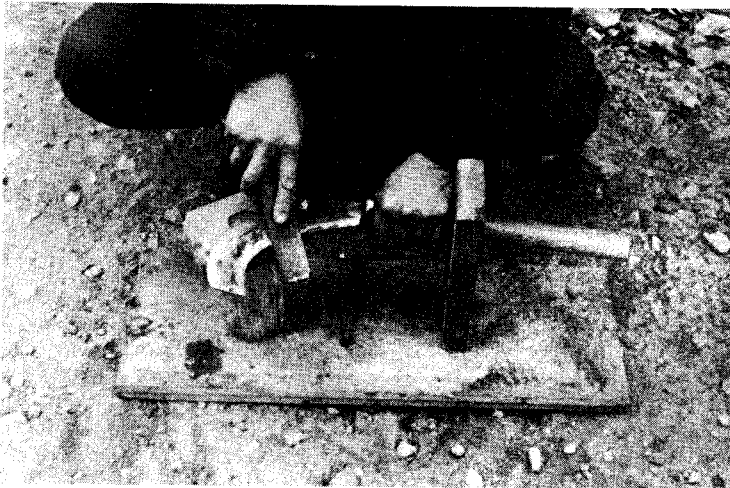
( II 図 )



枝打の技術について

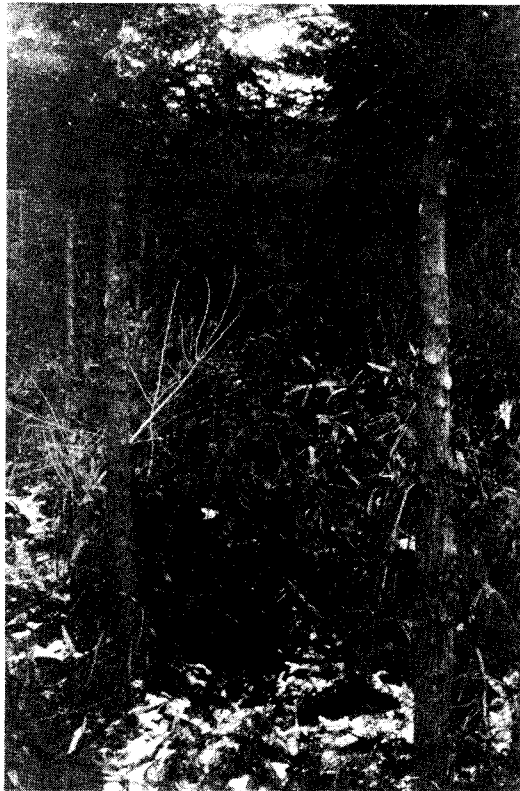
新勝鎌(小)の砥ぎ方



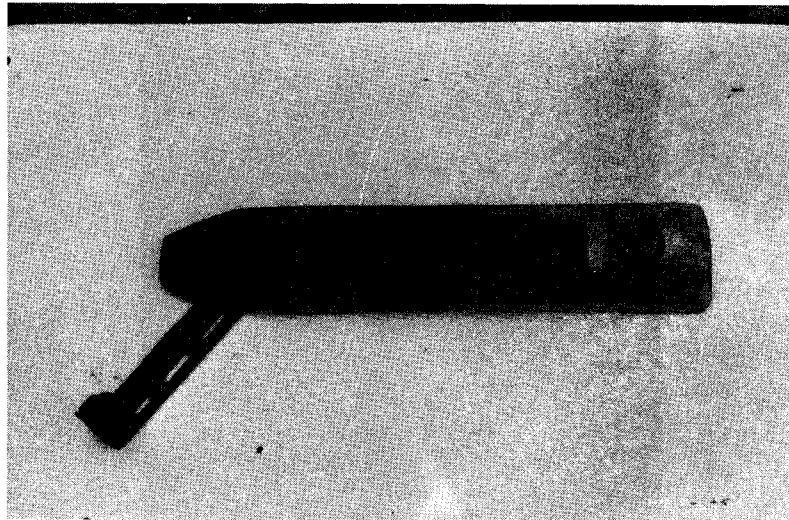
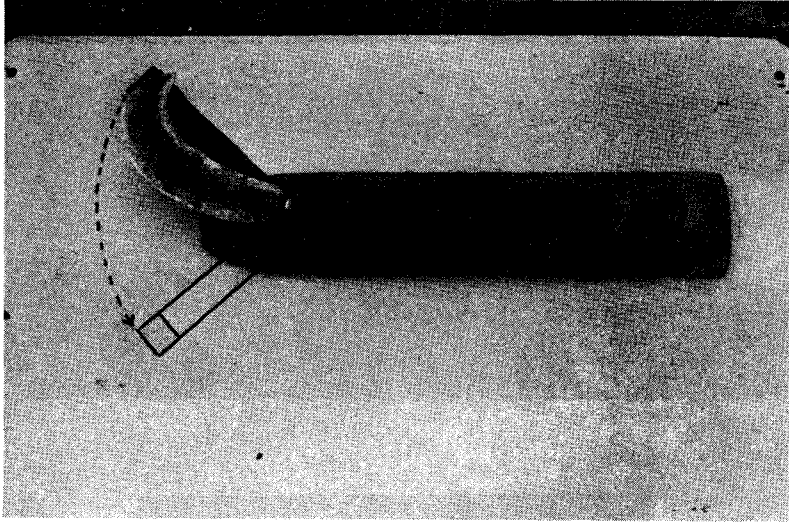


試作品の一部の紹介

枝打後の林分



砥ぎ台（最も良い作品）



はしているものの、それがなかなか守られないのが常である。しかしこの砥ぎ台を考案するに当たって、「どんなものでもよい、皆んな一人一個ずつ作ってみよう」という事で作った過程の中で班全体が目的達成のために丸となって考え話し合う姿を見た時、完成した砥ぎ台もさることながら班の雰囲気により改善され非常に意義があったと信じました。このことは個々の作業においても同じことである。数年前から徐々ではあるがその実績が実りつつあります。今後もどんな些細なことであってもこの作業器具や作業方法等を改善する中で得た経験を活かして明かるい作業班に導いて行きたいと思います。

(2) その他の鎌にも使用できる。

今後も使用していく中で、この試作品は安定した状態で砥げ、さらに個人差はあるが砥ぎ時間が約10～15分程短縮され、そしてこの砥ぎ台で(大)の新勝鎌や下刈鎌等に使用できないものかと考えたところ少し手を加えることにより使用することができた。

## 6. 枝打の技術について(Ⅱ図参照)

現地は主に傾斜地で、又雑草木のあるところが多く砥ぐ時安全上不安でもあり最初は1人2丁持って作業すればよいと考えていたが、これは枝打技術により切れ味を長持させることができることを知り1丁ですむことを体験しました。

その使用方法は、右手で鎌を持ち左手で枝を下に引張って鎌で引き切ることで張力が働き太い枝でも容易に切ることが可能だからです。このことは刃の損傷が少なく叩き切る方法と比較すれば長時間使用可能です。生枝ばかりの林分ならば午前、午後の2回砥ぐことで鎌は1丁ですみます。そして前記のように鎌は右手だけで使用するので滑べる恐れがあり安全上危険と考えナイロンホースで柄尻に滑り止めをした。

## 7. おわりに

造林事業では刃物による作業が殆どであり刃物が切れるか、切れないかで仕事の能率と質が大きく左右されます。この砥ぎ台は完璧なものではありませんので今後機会あるごとに改良し、より良いものにしていきたいと思いますが、なお、お気付の点があることと思いますので皆様の温かい御指導をお願いします。